

5. 最終学年 —1960年—

春季リーグ戦

禍が福となる —対立大戦—

最終学年ともなると、試合に投げるのは好きでも練習はあまり好きでなかった私も、練習自体が面白くなってきた。開幕を1週間後に控えて、200球の投げ込み1週間がほぼ終了した頃、突然背中が痛くなった。息をするのも苦しく、とても練習をするところではない。東大病院の整形外科に行き、レントゲン写真も撮って診察してもらった。特に悪いところは見当たらず、しばらくすると治りますとの見立てであった。翌日には通常の生活はどうかできるようになったが、走ることも投げることもできない状況は変わらない。焦ってもしようがないとは思いながらも、練習ができないことは精神的にきわめて苦しい。毎日、グラウンドに出ては、いらいらしながら、痛みを堪えながら体を動かしていた。これが良くなかった。背骨の周りの筋肉が炎症を起こしたのである。開幕を2日後に控えた練習が終了した時、主将の片桐が彼の家の近くにある整体師のところに行くから一緒に行かないかと、私を誘ってくれた。その若い整体師は、背中に少し触ると、背骨がひとつ横にずれているとすぐに言って、すぐに元に戻してくれる治療を施してくれた。効果はてきめんであり、翌日には投げることができた。軽くしか投げられないが、それでも全力で投げるよりも球はむしろ走っていた。十分な投げ込みによってフォームが固まったところに、休養を十分とったので、肩、腕、腰などが力を入れなくとも、正常に働いてくれたのである。

初戦の相手は前年秋の優勝チーム立大であった。その試合に先発できた。投げられるだけでも嬉しい上に、ストレートが絶好調。7回までを被安打4、与四球1、失点1に抑えることができた。味方も安井投手(甲子園の優勝投手)に安打3本、四球1、無得点に封じられていた。あまりにも淡々と回が進んでいくことに腹を立て、8回2死から四球に出ると、ノーサインで盗塁を試みた。投手は全く警戒していなかったので易々と成功。これは私の初めての盗塁であった。これに応じて、代打の池永選手が中前にテキサス安打を打ち、悠々生還して同点とできた。しかし、それも束の間、9回表、左の松川選手にこの日3本目の安打を三遊間に打たれる。次の4番杉本主将の二塁ゴロは併殺向きの打球。それを伊能二塁手が左翼へ転々とする悪送球をして、一・三塁のピンチとなった。彼のエラーは珍しく、これ以外私の記憶にはない。次の左打者今西を敬遠して満塁策をとる。遊ゴロ本封で1死をとったが、次打者の左足にぶっつける死球。シーズン最初の試合にサヨナラ負けを喫した。

2回戦は、0対0の5回2死満塁で鈴木を救援した。この試合を3対0で勝つことができた。開幕直前の1週間を全く投げることも走ることもできなかったお陰で、疲れがすっかりとれたためか、ストレートの伸びが良く、被安打1で無四球。ほとんどヒットを打たれる気がしなかった会心の試合であった。

決勝戦は、2対1でリードした3回裏無死一塁で鈴木を救援した。以後被安打1、四球1、自責点0で抑え、3対2で勝つことができた。2年の秋以来と久し振りの勝点であった。これは立大からの

21シーズン振りの勝点でもある。4回1死満塁で私が選んだ四球が結局最後にものをいった。1回と4回の失点はいずれも2死三塁から三塁ゴロエラーで与えたものであった。自分が好調な時は、選択肢が多い。そこで、最終回は、ゴロを打たせないために高めの直球で勝負することにした。今西中飛、丸山中飛、戸田右飛といずれも良い当たりの外野飛球に打ち取れ、私にとって会心の勝利となった。

5万人の大観衆 一対早大2回戦一

次の相手は前年2位の早大であった。延長11回裏1死満塁から、押しだしの四球を高橋が選び、サヨナラ勝ちした思い出深い試合である。立大2回戦から数えると3連勝である。どちらも私にとって初めての経験。また、珍しく無四球試合、初の完封勝利でもあった。

公式の記事には、「11回裏、先頭の飯島選手がレフト線に二塁打を放つ。これが東大にとっては2本目の安打。バントで三塁へ送る。早大ベンチはこれまで無四球の金沢に満塁策をとらせる。天野、片桐を敬遠して満塁。動揺した金沢は、ストライクが入らず2ボール、満場騒然の中で金沢は三球目やっとストライクをとった。高橋がボックスをはずしている時投げる球はストライクに入るが、打者が立つとまるきりボール。ついに1-3から押し出しの決勝点を与えた」とある。

実は、1-3からスクイズのサインが出ていた。私は次打者であったので、そのサインをウエイティングサークルで確認している。高橋はバントの構えをして、インコースのボールを落ちついて見逃した。後で良くボールを見逃したなど高橋に言うと、彼はボールになると確信してバントの構えをしたのであって、スクイズのサインを知らなかったと私に答えている。もし、サインを知っていたら、ボールを見逃していなかったように思う。勝つ時は、運も味方をするようである。

2回戦は、試合開始前、グラウンドに入った瞬間、五万人の観衆の歓声と拍手に迎えられた。この観衆のほとんどがわれわれを応援してくれたのは感激のきわみであった。0対0の5回無死で安打が出たところで、鈴木を救援。バントと末次の安打で1死一・三塁と迫られたが、安藤を三振、伊田を遊ゴロに打ち取ってピンチを逃れた。次の6回、先頭の村瀬に3塁打を打たれた。そして、次打者徳武に三遊間を破られて一点をとられ、これが決勝点となり1対0で終わる。これがもし七回であれば、外野フライを打たれる確率の高い徳武を敬遠して、1点もやらない策を取っていたはずである。1点は返せる可能性があると考えて、2点目を与える確率の高いこの策は取らなかったのである。3年の時は、戦う試合すべてを勝つつもりで神宮に向かった。最終学年になって、すべての試合を接戦に持ちこみ、その半分を勝てば良いと思うことにした。それがおのれを知ることであり、最良の結果を生むと考えたのである。ここで徳武と勝負したのも、勝利へのこだわりを少し控えた結果でもある。試合が終わってから悔やまれた点である。

空虚な賛辞

この試合を最後に勝てなくなってしまった。その理由の一つは、この2週間、ランニングが全くできず、シーズン前に蓄えたスタミナを使い果たしたことが挙げられる。背骨がずれただけでなく、無理をして練習したため、骨の周りの筋肉が炎症を起こし、これを直すために、毎日、風呂に入って体を柔らかくし、急いで治療に通っていた。しかし、真の理由は、私のおごりにあったと思う。1試合勝つだけでは満足できず、勝点を挙げることにこだわり、ひとつひとつの試合に全力を尽くさな

ったことにある。今でもこれらの試合の記録は直視できないほど、後悔が激しいのである。

総評には、「今度のリーグ戦は最初から最後まで活気がみなぎっていたし、昨年の倍以上の観衆を動員することもできた。立大から久し振りに勝点をとり、早大からも一勝を奪って優勝の行方を左右する一役をになった東大は、結局後半には力尽きてまた最下位に終わった。リーグ戦、前半の波乱の主演となり東大旋風、岡村旋風とかいわれたりしたが、リーグ戦が終わった今日では、この賛辞も空虚なものとなってしまっただろう」と記されている。

昭和35年春季リーグ戦の記録

竜頭蛇尾のシーズンに終わった。シーズン前半には、上位の成績も望めたのに、またもや最下位。私は3勝5敗とほぼ平均的な記録であるが、精神的な振れ幅の大きい日々であった。

優勝	法大	9勝	3敗	0分	4勝点
2位	早大	8勝	5敗	1	4
3位	慶大	8勝	4敗	1	3
4位	明大	4勝	7敗	1	2
5位	立大	5勝	9敗	1	1
6位	東大	3勝	9敗	0	1

対立教

1回戦 (4月15日) 24敗目 (岡村)	東大	0 0 0	0 0 0	0 1 0	1
	立大	0 1 0	0 0 0	0 0 1	2
2回戦 (4月17日) 12勝目 (鈴木、岡村)	立大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
	東大	0 0 0	0 2 1	0 0 X	3
3回戦 (4月18日) 13勝目 (鈴木、岡村)	東大	1 0 1	1 0 0	0 0 0	3
	立大	1 0 0	1 0 0	0 0 0	2

対早稲田

1回戦 (4月23日) 14勝目 (岡村)	早大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0	0
	東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 1	1

早大ベンチからゆっくりいけとどなりながら試合が始まった。これは岡村のペースにはまり込むまいという意識が過剰となって、現れている証拠。それでいてかえって岡村のペースにのった。4回1死から住沢が初安打したが村瀬とダブル、5回には徳武が右前に快打、ていねいに送ったが、奥村が三振、石黒もフライを打ち上げた。東大は初回に伊能がしぶい内野安打ただけで4回まで金沢にびったり押さえられる。金沢は昨年よりぐっとスピードを増して好調。岡村も立大戦よりはシュートが変化して威力がある。

東大は5回片桐が高く打ち上げたフライを金沢が及び腰で落とす失策に恵まれ二盗とバントで1死三塁という絶好機をつかんだ。このチャンスに東大は初球スクイズを狙ったが空振りとなって失敗した。早大も6回二塁打の末次が捕手の二塁悪けん制で無死三塁という好機を持ったが、金沢が中飛、所が一ゴロ、住沢が右飛という不甲斐なさで岡村を崩せなかった。こうして今期初の延長に入ってしまったわけである。(観衆三万五千)

2回戦 (4月24日) 25敗目 (鈴木、岡村)	東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
	早大	0 0 0	0 0 1	0 0 x	1

この日の神宮は第一試合の半ばごろからドンドン空席が埋められていった。いつもの東大の試合となると回を追って観衆が減っていくのだが、今季の異数の活躍が新しい観衆をも引きつけたのだ。早-東戦始まって以来の大観衆が見守る中で試合が始まった。東大が岡村を休ませて、鈴木を起用すれば早大は安藤で対した。安藤はスピードがやや不足だが得意のシュートに加えて外角直球がぎりぎりいっぱい決まって好調、鈴木はゆるいカーブがストンと外角に落ちてこれまた精一杯のピッチング、そこで1回戦同様スコアボードに0が並んだ。

東大は2・4回に走者を三塁まで進めれば、早大も3回、2安打を放って形勢は全く互角。早大に5回無死で鈴木のア打が出るといよいよ千両役者岡村の登板となった。岡村はバントと末次の安打で1死・三塁と迫られたが安藤を三振、伊田を遊ゴロに打ち取ってピンチを逃れた。早大は前日から数えて15回、1点も取れない。そう思った矢先村瀬の三塁打が出た。二塁手の頭上を越えてゴロで右中間を抜けた一打。次打者徳武は二球目を三遊間に痛打した。これによって早大はようやく1点を得た。

優勝候補筆頭の看板を中心打者の好打で辛くも保った場面である。早大もその後、岡村に封じられれば、東大も5回以後リードを背負って快投する安藤を打てない。結局この得点が決勝点となった。東大の両投手は好投したけれども味方の打力はわずかに一安打を放っただけという貧攻では報いられることはなかった。(観衆五万)

3回戦 (4月25日)	早大	1	2	0	2	0	0	1	6
(鈴木、岡村)	東大	0	0	0	2	0	0	0	2

早大は東大先発鈴木投手の無制球を制し好田の適時打で先行。2回にも三塁失と野村の安打、スクイズで1点を追加し、難なく鈴木を退けて岡村を迎えた。早大はなおもエース岡村に楽な気持ちで立ち向かい住沢の安打でこの回2点をあげて優位に立った。5回には2死から徳武、好田の連安打と石黒の長打で文句のない2点を加えて一方的な楽勝を思わせた。ところが東大もこの裏奮起して連投でやや球速の欠けてきた安藤を狙い打ち、代打池永の安打と岡村の巧みなブレース・ヒットが二塁打となり1点、つづく飯島もよくねばったあげく中前に快打して堂々2点を返し、東大の追撃に興味がかげられたが、6回救援した金沢の下手投げに翻弄されて押し切られてしまった。岡村は5回に打たればしたが、やはり頭腦的な投法を見せ、球にも力が感じられていた。もし彼が先投しておれば早大も心理的にゆとりを持てなかっただろうから1・2回でこうたやすくは得点出来なかったろう。

これは私に対する過大評価。シーズン直前に痛めた背骨の周りの筋肉が炎症を起こしており、これまで試合では投げることはできたが、練習ではほとんど走ることが出来なかった付けがまわってきた感じで、下半身に力がなくなってきていた。

対慶應

1回戦 (5月8日) 26敗目	慶大	2	1	0	0	2	0	1	1	7
(岡村、鈴木)	東大	0	0	0	0	0	0	3	0	3

東大旋風の日、岡村の右腕はいつもの高目に浮く球に伸びがなく、低目へもうまく落ちなかったので慶大打線はこの岡村を鋭くおそった。立ち上がりの安藤の二塁打は守備もまずかったが、小島、村木は遊撃の右左に強い当たりの安打を放った。この間、東大内野陣のまずいきょう殺プレーもあって慶大はやすやすと2点を奪い、2回には村橋、安藤の長打で1点を加えた。5回安藤が左中間に三塁打すると岡村は指を気にしながら自らプレートを降りた。角谷はシュートとカーブをうまくつかって危なげなく慶大の楽勝が予想された。6回からは余裕を持って加藤を繰り出した。8回慶大は敵失と村橋の安打でさらに1点を加えた。ところがその裏加藤が打たれた。それまでもたもたしていた東大打線はここで元気を出し佐藤も中前にたたいて二者を返し、伊能もねばった末、ライト線にたたいて1点を増し、スタンドを騒然とさせた。慶大はここで三浦を繰り出し逃げ切った。9回にも慶大は1点を加えたが、若い加藤になまじチャンスを与えたため思わぬ苦戦となったが、岡村のくずれた東大には勝算はなかった。(観衆二万五千)

2回戦 (5月9日)	東大	3	0	0	0	0	0	0	0	3
(岡村、鈴木)	慶大	0	1	0	0	2	0	0	1	4

東大初回の速攻に3点を失い旗色の悪い慶大ではあったが、じりじりと追い込んで9回裏角谷、安藤の連続二塁打でサヨナラ勝ちを収め、辛くも連勝した。東大の初回はすこぶる強気な攻撃ぶりだった。飯島の左前安打に続き伊能は二塁左を突破、天野はバントの構えすら見せず二塁ゴロで両者を進めた。片桐が外角低いカーブにひっかかって三振したが、これを捕手後逸して飯島還えり、命拾いの片桐は二盗に成功した。高橋は2-0と追い込まれながらカーブを左前に2点安打、全くムダのない攻撃で慶大は顔色なかった。

その裏慶大は二塁打の安藤はバントで三進、小島の右飛で本塁をついたが、右翼手の好返球に刺されるなど、東大は守っても浚刺たるものだった。慶大は二回村木、大橋の長短打で1点を返したものの岡村のカーブとシュートを持て余した形で楽観は許せなかった。5回無死一・二塁を逸機して東大の雪辱も予想されたが、そうした時、村木に起死回生の2点本塁打が出た。岡村としては1-0から外角にはずすつもりだったに違いなく惜しまれる一投だった。

この球については全く憶えていない。同点でマウンドを降りた数少ない試合となった。しかし、早大までの試合で自信過剰になっていたことが裏目に出たことは間違いない。また、勝ちに対するこだわりがシーズン前に考えたよりも強くなってきたことが結果を悪くしたとシーズンが終わった時に感じたのであるがすでに後の祭りである。

角谷は速球で、鈴木はゆるいカーブで譲らず投げたので引き分けも考えられたが、それまで外角によくコントロールしていた鈴木は制球がわずかに乱れたため慶大の痛撃を受ける羽目となった。

対明治

1回戦 (5月15日)	明大	0	0	3	0	0	1	0	4
(樋爪、岡村)	東大	0	1	0	0	0	0	0	1

試合は東大が先手をとった。2回遊ゴロ失の片桐が二盗した2死後、佐藤の二塁左を抜く二塁打で片桐をかえした。今季初めての先発樋爪は大きなカーブでよく投げた。だが、4回先頭奥田に中前安打された。これが2本目のもの。松田にバントを許した東大ベンチは高畑を歩かして慎重に岡村にスイッチした。だが漆畑は1-3から内角高目をカーブ叩くと左翼ギリギリに入る3ラン・ホーム「内角低目に落ちるボールを投げて併殺を狙うつもりだった」(高橋捕手の話)この球の記憶はない。そして8回にも高畑の適時打で1点を追加した。反撃を試みる東大は、四、五回先頭打者が安打を放ちながら強攻策でつぶし、8回伊能、天野が連打し片桐が四球を選んで一死満塁と絶好機をつかんだが、高橋、代打池永が凡退して得点に結びつけえず、1回戦を失った。(観衆六万)

2回戦 (5月16日) 27敗目	東大	0	1	0	0	0	0	0	1
(岡村)	明大	2	0	2	0	0	0	1	X

岡村はリーグ戦が深まるとともに疲労が出てきたようだ。初回いきなり井上に左中間を破られ、続く高橋に右翼線一杯に二塁打されて1点、2死後漆畑にも長打されて2点を失った。漆畑の一打は右翼手の拙守からだが、いずれもいい当たりをされて精彩がない。それでも汗をふきふき懸命に投げる、だが三回井上に右前へ安打され、高橋には死球、バントで送られたあと高畑にスクイズを決められ、漆畑には2本目の二塁打を喫して決定的な2点を許してしまった。明大は8回にも一枝の左翼越え二塁打で1点を追加し、東大に連勝。初勝点を上げ4位にあがった。(観衆二万)

対法政

1回戦 (5月28日)	法大	1	0	0	1	3	0	0	4	9
(鈴木・樋爪・滝川)	東大	0	0	0	0	0	0	0	0	0

岡村投手が法大打線をどうさばくかがこの試合の興味だった。しかし、東大は鈴木を先発させた。法大は初回からよく打ち、鈴木、樋爪、滝川の三投手に14安打をあげて大勝した。(観衆六千)

2回戦 (5月29日) 28敗目	東大	0 0 0	0 0 1	1 0 0	2
(岡村、樋爪)	法大	1 2 0	0 4 2	0 0 X	9

東大にシーズン前半の元気が見られない。岡村の登板で必勝を期しながら初回にして2死から室山、山本の連打と片桐の手痛い失策で法大に先取点を許したこともよろうが、あの東大旋風といわれたころの気力がどこにも見られない。これでは法大の敵ではなかった。法大は2回にも田中の二塁打から併殺を焦った二塁手の一塁悪投や宇野のタイムリーで2点を追加して簡単に主導権を握ってしまった。瞬間風速15メートルの強い風が、バックネットからセンターに向かって吹いている。岡村はこの向かい風を利用して、沈む球カーブを多投したが、ストライクとボールがはっきりしすぎた。(観衆五千)

秋季リーグ戦

開幕6連敗 一対法大・早大・慶大戦一

いよいよ最後のシーズンとなった。夏休み前に卒業論文に取りかかる。午前中コンクリート実験室に通い、午後にはグラウンドで練習という生活を続けてみた。しばらくすると、体がひどく疲れていることに気づき、実験室に通うことは中止した。その頃、右腕を曲げたままで眠ると、朝起きたときには、腕を伸ばすことが出来ないといった症状も出るようになった。右肘の外側が冷たくなって、血が通っていないような感覚であった。昼までに少しずつ肘を動かしていると、午後には投げることができる状態になる。毎日がこの繰り返しであった。また、背骨の一番下も長く座っていると著しい不快感を感じるようになっていた。なお、これらの症状は、卒業後1年ほどですべてなくなってしまった。投げ過ぎがその原因であったようだ。

練習では、全地球が走らない。ストレートを投げても、ホームベース付近でお辞儀をしてしまう。この状態で、開幕の対法大戦を迎えた。先発投手は鈴木である。今までの私の実績を監督は評価してくれていないと、不調だけに一層寂しい気分であった。一方、鈴木投手はすこぶる好調であった。8回までは完璧の投球で0点に抑えた。ところが味方は、6回まで8安打を放つも拙攻につぐ拙攻で無得点である。9回にとうとう1点を失い、2人の走者を残して、樋爪にマウンドを譲った。5対0でまず開幕戦を落とした。

2回戦は、前日完投に近い鈴木投手は投げられる状態ではない。樋爪投手も1回戦を見る限り、先発は無理である。私の先発となる。しかし、全くの不出来であった。2回には死球と長単打でまず1点。3回には1四球と4長単打で3点。そして、5回には本塁打で1点と、5回までに5点を取られてしまった。そこで、交代である。試合は、12対0での惨敗であった。

次の早大戦は、私の先発であった。3回には、早大安藤から岡村右前安打の後二盗、伊能の安打で無死一・三塁、2者凡退の後片桐の安打で1点を先取した。この1点を守りきれずに、延長10回、1対1の引き分けに終わる。6回2死走者一塁のとき、私の牽制悪投で走者三進の後、徳武に遊撃強襲打を打たれて同点にされたのである。そして8回には鈴木に交代。彼は3回を1安打1四球に抑えた。

この試合、私は無四球ながら8安打を打たれている。

2回戦は鈴木が先発した。4回までは0点に抑えたが、5回に2点を失ってなお1死2走者を残して、樋爪に交代した。樋爪は2四球で押し出し。そこで私の登板である。なんとか併殺で切り抜けたが、6回に1点を失った。そして、7回終了まで投げて、そこで降板。6対0でこの試合を落とした。何のために登板したのか疑問を抱いた試合であった。

3回戦は完投して、5対1で破れる。1回に2点、7回に2点、8回に1点と小刻みに失点を重ね、被安打10、与四球2と打ち込まれた。

対慶大1回戦には先発した。4回に自責点0で1失点。そして、5回に本塁打を打たれたあげく、2死二・三塁に走者を残して、鈴木の救援を仰いだ。6対0での敗戦。

2回戦も先発した。この試合も、2回に1失点、4回に2点を取られて、なお1死二塁に走者を残して交代した。試合はまたも7対0の惨敗であった。残り2チームの対戦を残して、既に6連敗を喫しており、チームのムードが極めて悪くなった。2年生で私が登板するようになって以来、初めてのことである。

6連敗後の3連勝 ー対明大2・3回・立大1回戦ー

ここで、比較的相性の良い明大と当たったのが幸いであった。1回戦は、鈴木が先発して好投、1対0の1点リードで4回を終えた。しかし、5回に、安打の先頭打者をバントで送られた後、連続安打で同点とされ、なお走者一・二塁のピンチを招いた。ここで、ようやく私の出番となった。続く2人を討ち取ってピンチを脱し、以後延長11回までを0点に抑えることができた。このシーズンになって、点を取られなかった初めての試合である。すこし、光明が見えてきた。味方も以後無得点で、この試合は引き分けに終わった。

対明大の2回戦は、先発の鈴木が立ち上がりの1回、無死で安打を2本打たれると、私に交代した。このような早い交代は初めてである。監督も少し焦っていたのかもしれない。捕手高橋の牽制悪投で走者二・三塁となったピンチを私に防ぐ能力はなかった。次打者に打たれて2点を先取されたのである。しかし、3回に、岡村四球、伊能バント、天野中前安打で1点目、片桐四球、佐藤右前安打で2点目、飯島左前安打で3点目と、この日の5安打、3四球の中の3安打と2四球をこの回に集めて逆転できた。さらに、8回には天野、片桐の連続二塁打で追加点をとった。安打のすべてをこの2インニングに集中できたことは極めて希有なことであった。これに励まされ、9回1死から代打田口に本塁打されたものの、この1失点に抑えて4対3の接戦をものにし、このシーズンの初勝利を挙げることもできた。

続く3回戦は、5回に挙げた1点を守りきり、1対0の完封勝ち、最下位脱出の勝ち点をとることができた。8回2死無走者で、前日本塁打を打たれた田口が代打である。前日は少し甘く見て打たれたので、実は全く怖くはなかった。小柄な彼のような打者は、むしろ私にとっては得意なタイプで、普通に投げればまず打たれないはずである。この日は全力を尽くして、無事三振に仕留めた。

対立大1回戦は5対2の快勝であった。これで、明大2回戦から3連続勝利である。勝てる時は勝てるものである。この試合、1点リードの2回裏、先頭打者に安打を打たれたところで鈴木を救援した。この回、1死一・二塁から適時安打を打たれて同点とされた。このような場合、先頭打者になると、何とか出塁しようとするのが、私の意地である。3回には、先頭打者で四球をとる。天野安打の

後に出た片桐の二塁打で生還1点をリード。天野は本塁でタッチアウトとなったが、佐藤の適時打がでてさらに1点を追加、3対1とリードを2点としてくれた。7回裏に1点を失って、1点差となった8回表、先頭打者で中前安打を打った。そして、片桐四球の一・二塁に佐藤の適時打がでて、私に続いて片桐も生還して2点を追加し、勝利を確実にしたのであった。

2回戦は、鈴木、樋爪が好投したが、打線の援護がなく、3対0。1勝1敗となった。

最終戦 一対立大3回戦

いよいよ本当の意味での最終戦である。私は、立ち上がりから球威も制球力もない。1回裏1死後、安打、死球、四球で満塁とし、さらに安打と二塁打で一挙4点を失う。この日は日頃あまり打てなかった古舘、高橋、小池がこの日最後とばかり、3人で合計7安打11塁打3打点と大当たりし、2回4点、3回1点をとって、たちまち逆転してくれた。日頃からもう少しリラックスできれば、この日のように良く打つ力を彼らは持っていたと残念である。

私は、依然として不調であって、3回裏、二塁打1本を含む5安打を釣瓶打ちされ、3点を失った。途中で当然交代すべきであり、そうすれば勝つチャンスは十分にあると思って、何度か監督の方を見た。最後の試合だからといって私に義理立てをする必要はない。監督はチームが勝つべく全力を尽くすべきであると。しかし、監督は代える素振りも見せない。中途半端な気持ちで投げているうちに、3点を取られてしまった。次の回も交代はない。ここで、初めてこの試合は最後まで投げるのだと覚悟を決めざるを得なかった。今までの最高14安打を打たれ、10点を取られて完投した。打たれると分かっているのに投げる辛さとチームに申し訳ないという気持ちの二重の苦しみを味わいながら投げ続けた試合であった。

いつも好意的な好村さんが以下のように書いてくれている。「岡村が好調であったとしたら、立大もこうたやすくは得点できなかったであろう。かりにこの試合が最終戦でなかったら東大渡辺監督は岡村に救援を送っていただろう。それほどこの日の岡村には精彩がなかった。軟投の下手投げで4年間投げ通した岡村投手に対し、監督は彼に勝敗を離れておそらく思い出の完投をさせたかっただろうと察せられた。両チームの点差は開いたが、勝敗は別として両チームが積極的に打ち合い、試合は乱戦模様であったが興味深い一戦であった。優勝から遠く離れた両チームが最終戦の勝利を争って力一杯のプレーを見せたのは嬉しい。立大の杉本、安井ら東大の岡村、高橋の上級生はこの一戦で学生野球を終えるわけだが、学生野球の最終戦はどんな試合であろうとなかなか頭から消え去らないものとなろう」

現在、毎年3月6日には、共に戦った六大学の同期達(昭和36年卒)が集まって親交を深めている。最初に集まったのは、卒業後20年を経過した頃であった。その時は、試合の場面での思い出話を中心であった。今は過去の話をするのではない。

早慶6連戦

このシーズンは、早大が早慶戦を2勝1敗で制し、慶大と同率となり、両者の優勝決定戦となった。有名な早慶六連戦である。早大の安藤投手は、リーグ戦の最終試合を完封した後、優勝決定戦3試合をすべて完投し、4連続完投という離れ業を演じて早大に優勝をもたらした。対する慶大は、丹羽、三浦、角谷、清沢と4人の優秀な投手を擁していたが、安藤1人に名を成さしめたのである。私たち

は、久しぶりの5位である閉会式に参列するため、早慶2回戦から毎日神宮に通ったが、それも良い思い出となった。この6連戦だけの観衆は延べ30万人であり、このシーズンの観客数は100万人を越えることになった。以後これを越えたことはない。



昭和35年秋季リーグ戦閉会式(左から1位の早大, 以下, 慶・法・立・東・明の順: 東大は5位)
 —早慶6連戦の最終日—

昭和35年秋季リーグ戦の記録

最初6連敗し、チームの雰囲気はすっかり暗くなっていたが、最後の2チームとは互角に渡り合い、勝ち点を明大から挙げる事ができた。これによって、かろうじて最下位を免れた。私の成績は春と同様3勝5敗に終わる。ほぼ平均的な記録であるが、最終戦が惨めな結果に終わり、心からは最下位脱出を喜べなかった。この3年間に、4点以上とってくれた試合が合計8試合ある。7試合まではすべて勝っていたのに、最後の1試合を落としてしまったのである。

優勝	早大	9勝	4敗	2分	4勝点
2位	慶大	9勝	4敗	0	4
3位	法大	7勝	4敗	1	3
4位	立大	6勝	7敗	1	2
5位	東大	3勝	8敗	2	1
6位	明大	2勝	9敗	4	1

対法政

1回戦 (9月17日)	法大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	5
(鈴木、樋爪)	東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
2回戦 (9月19日) 29敗目	東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
(岡村、鈴木、花村)	法大	0 1 3	0 1 0	6 1 X	1 2

対早稲田

1回戦 (9月24日)	東大	0 0 1	0 0 0	0 1 0	1
(岡村、鈴木)	早大	0 0 0	0 0 1	0 0 0	1
2回戦 (9月26日)	早大	0 0 0	0 3 1	0 0 2	6
(鈴木、樋爪、岡村、滝川、花村)	東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
3回戦 (9月27日) 30敗目	東大	0 0 0	0 0 0	0 0 1	1
(岡村)	早大	2 0 0	0 0 0	2 1 X	5

対慶應

1回戦(10月8日)31敗目	東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
(岡村、鈴木、樋爪)	慶大	0 0 0	1 1 3	0 1 X	6
2回戦(10月9日)32敗目	慶大	0 1 0	3 0 0	3 0 0	7
(岡村、樋爪、鈴木)	東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0

対明治

1回戦 (10月15日)	明大	0 0 0	0 1 0	0 0 0	0 0	1
(鈴木、岡村)	東大	0 0 1	0 0 0	0 0 0	0 0	1
2回戦 (10月16日) 15勝目	東大	0 0 3	0 0 0	0 1 0	4	
(鈴木、岡村)	明大	2 0 0	0 0 0	0 0 1	3	
3回戦 (10月17日) 15勝目	明大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0	
(岡村)	東大	0 0 0	0 1 0	0 0 X	1	

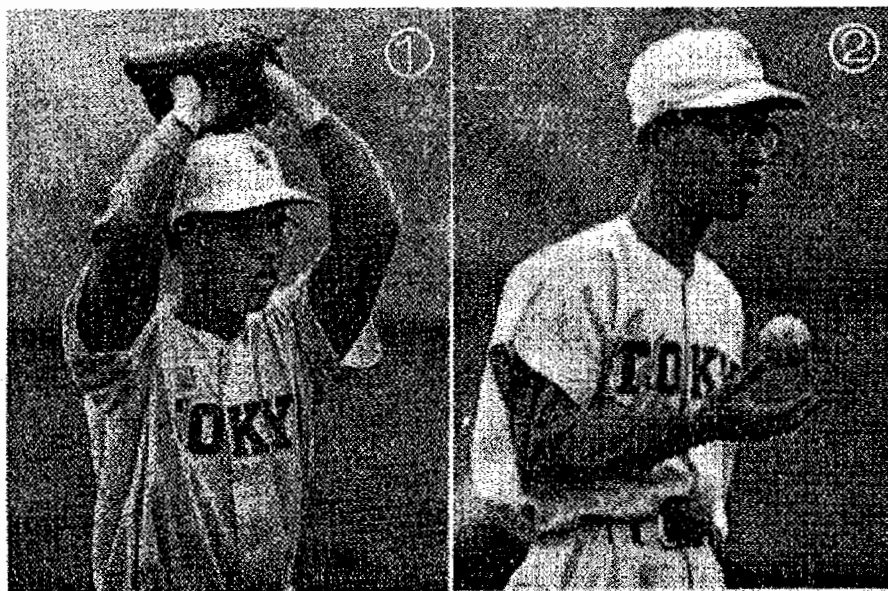
選手の質量から見て、明大は東大に見劣らないが、明大はすっかり岡村のピッチングに巻き込まれていた。岡村の立ち上がりは芳しくなかったが、回を重ねるごとに絶妙のコントロールで外角へカーブ、直球をうまく配し、スピードにも緩急を加えるなど、見事な投球で明大の反撃を切り抜けていた。東大の勝利点は5回2死2ゴロ失に出た天野が二盗に成功、片桐四球、続く佐藤は光山の内角球をつまんでスイング、この市田は一塁背後の幸運な安打となって生還したもの。もっとも東大は4回まで毎回走者を出しながら得点できなかった。6回1死高橋三塁打、五十嵐は0-2からスクイズ、高橋が本塁をついて倒れたのは惜しかった。明大は六度先頭打者を送りながら決定打不足に破れたと云ってよい。ことに惜しかったのは、7回1死走者二塁、代打八木の一・二塁間の安打性のゴロを古館一塁手の超美技で一投と送球されて同点機を逸したことだろう。

対立教

1回戦 (10月29日) 17勝目	東大	1 0 2	0 0 0	0 2 0	5
(鈴木、岡村)	立大	0 1 0	0 0 0	1 0 0	2
2回戦 (10月30日)	立大	2 0 0	1 0 0	0 0 0	3
(鈴木、樋爪)	東大	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0
3回戦 (11月1日) 33敗目	東大	0 4 1	0 0 0	0 1 0	6
(岡村)	立大	4 0 3	1 0 2	0 0 X	1 0



イニング合間の投球練習（4年生時：後方は主将の片桐選手）



①三日間の連投にもめげず、疲労を耐えての力投

②さあ今度はどんな球をなげるかな、得意のポーズ

新聞記事から（4年生時）

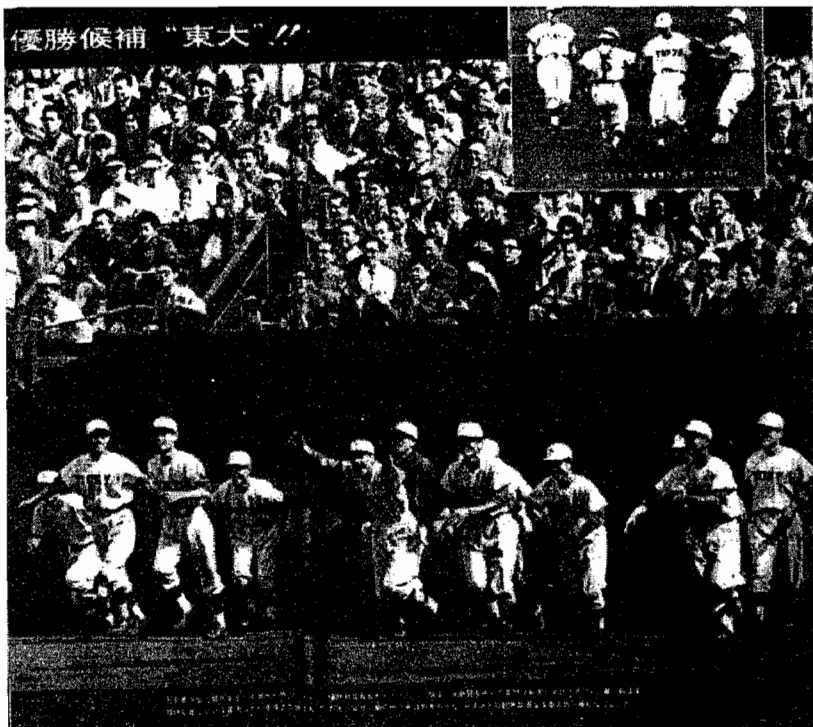


神宮の
 2年一回
 同 行 山 崎 宗

東大敵裏の勝点
 是前年を金引ききりしは
 空前の勝点三塁打者の中
 へては打者あり

今季最高の出来
 冠い越 直球で勝負

明大から勝ち点・完封（昭和35年秋季リーグ戦・P39 参照）



週刊誌から